

# 戦士と食卓

——ギリシアポリスと政治の条件——

的射場 敬 一

## 目 次

はじめに

### 1. 暗黒時代の村共同体

1.1. ミケナイ文明の崩壊と農民

1.2. 天水農業

1.3. フラトリア（兄弟団）とプリュタネイオン

### 2. 暗黒時代末期の王政

2.1. 『イリアス』の農民戦士

2.2. ホメロスの王政

### 3. ポリスの形成と市民

3.1. 戦士共同体

3.2. 祭祀団体

3.3. ポリスと市民

結びに代えて

## はじめに

ギリシア各地に「都市国家」(city-state) という意味でのポリス (polis) が誕生するのは紀元前8世紀の頃のことである。ギリシア世界は、人口が急増し、物質的にも精神的にも豊かになってきており、ようやく「暗黒時代」<sup>1)</sup> を脱し始めていた。紀元前776年には、オリュンピアで最初の競技会（第一回古代オリンピック）が開催され、ホメロスの英雄叙事詩『イリアス』『オデュッセイ

ア』やヘシオドスの『労働と日』が書かれたのも紀元前750年から700年の頃である<sup>2)</sup>と言われている。

ポリスの形成についての言説は少なく、アリストテレスも「いくつかの村から生じ、言うなればいまやあらゆる自足の要件を満たした、終極の共同体がポリス国家である」<sup>3)</sup>（『政治学』第1巻第2章）と述べているのみである。つまり、ポリスは、いくつかの村共同体（komē）の集合体であるということである。

ポリスの形成についてのまとまった叙述では、プルタルコス<sup>1)</sup>の筆になるアテナイ建国の王「テセウス」についてのものがある。テセウスは、アッティカ地方を治めていた王であった。かれは、その地方に住んでいた人々を一つの町（ポリス）に「集住」（synoikismos）させることで、アテナイを建国した国民的な英雄として古典期には崇拜されていた。

「アイゲウスの死後、テセウスは大きな驚嘆すべき仕事を思い立ち、アッティカに住んでいた人々を一つの町に集住させ、それまでは散在していて全部に共通の利益のために呼び集めることが困難であるばかりでなく、時には互いに不和となって戦うこともあった人々を一つの国家のひとつの民衆とした。さて、彼は部落ごとに氏族ごとにまわり歩いて説きつけた。平民や貧民はただちに彼の訴えを受け容れたが、有力者たちには王のいない国制と民主制を約束し、自分はただ戦争の指揮者および法律の守護者になるだけで、他のことについてはすべての人に平等を認めるとやくそくした。

…そこでそれまでそれぞれの部落にあった公会堂や議事堂や役所を廃止して、すべてに共通な一つの公会堂と議事堂を現在の町にあるところに作り、その国家をアテネと名づけ、共通の祭典パンアテナイア祭を創始した。…それからテセウスは約束のように王政を廃し、神々のことを手はじめにして国制を秩序づけた。

…テセウスは国家をさらに一層大きくしようと欲して、平等を条件としてすべての人を呼び寄せた。そして「民衆よ、すべての人はここに来れ」という文句は、すべての民衆の一種の一体性を確立したときのテセウスの宣言であったといわれている。…アリストテレスがいうように、テセウスがはじめ

て大衆に味方して王政を廃止したことは、ホメロスも軍船表の中でアテネ人だけをデーモスと呼んで（『イリアス』2巻547）、それを証拠だてているようにみえる。』<sup>41</sup>（プルタルコス「テセウス」『プルタルコス英雄伝』）

ポリスの形成について、プルタルコスに拠りながら整理しておこう。

テセウスは、アッティカのいくつかの村共同体に「散在して」いた人々を、「一つの町に集住させ」、「時には互いに不和となつて戦うこともあった人々を一つの国家のひとつの民衆とした」のである。つまり、これが、アリストテレスがいうポリスは、「いくつかの村から生じ」ということの意味するところであろう。もちろん、「部落ごとに氏族ごとにまわり歩いて」あることから分かるように、地縁団体としての村共同体の存在だけでなく、血縁団体としての氏族（ジッペ）の存在を窺うことができる。

テセウスは、集<sup>シュノイキスモス</sup>住という仕事を上からの命令としてではなく、提案として出しているのである。提案の対象者は、村の有力者たる貴族だけでなく、平民も含んでいた。「平民や貧民はただちにかれの訴えを受け入れたが」というニュアンスが示しているのは、有力者たる貴族がテセウスの提案を渋ったのではないかということである。それゆえ、テセウスはかれらに譲歩し、「王のいない国制と民主制を約束し」たのである。テセウスは、「戦争の指揮者および法律の守護者」たることだけを自分の仕事として限定し、「他のことについてはすべての人に平等を認める」と約束した。

集<sup>シュノイキスモス</sup>住によって、「平等を条件としてすべての人呼び寄せた」のであり、「すべての民衆の一種の一体性を確立」としていることから、平民と貴族との関係は、「平等」であり、身分的な支配服従関係はなかったのではないかと推測される。

ポリスの形成のためにテセウスが行ったのが、「それまでそれぞれの部落にあった公会堂<sup>プリュタネイオン プーレテーリオン</sup>や議事堂や役所を廃止して、すべてに共通な一つの公会堂と議事堂を現在の町にあるところに作」ということである。つまり、それぞれの村共同体<sup>ジッペ</sup>にあった公的機関を一つに統合したということである。ここで着目しておきたいのは、「公会堂」と訳されている「プリュタネイオン」（prytaneion）

である。そこは、炉の神「ヘスティア」(hestia)が祀られている神聖な場所であった。プリュタネイオンの統合が示す意味については、後ほど考察したい。

「有力者たちには王のいない国制と民主制を約束し」とか、「テセウスは約束のように王政を廃し」とあるように、王が存在していたことが分かる。その王が王政を廃止するということであるから、当然のことながら集<sup>シユノイクスモス</sup>住という事態は、単に村共同体を統合し、村々に散在していた人々を一つの町に移り住まわせること以上の何かであったのである。つまり、それまでは王権によって担われていた軍事や行政、司法などの仕事が、他の誰かによって担われる必要があった。

「約束のように王政を廃し、神々のことを手はじめにして国制を秩序づけた」ということから、集<sup>シユノイクスモス</sup>住がまさに新たな共同体としてのポリスの形成であり、意志的な行為としてなされたと思われる。

この小論は、「テセウス伝説」をひとつの手がかりに、いかにしていかなるものとしてポリスが形成されたかを明らかにすることで、ギリシアにおける政治的なものの誕生の一端を明らかにしようとする試みである。

## 1. 暗黒時代の村共同体<sup>コームー</sup>

### 1.1. ミュケナイ文明の崩壊と農民

ギリシア世界は、ポリス文明に先行する古代文明を持っていた。ホメロスの英雄叙事詩の舞台ともなったミュケナイ文明である。紀元前1650年頃から栄えたこのギリシアの古代文明は、政治・経済・軍事・宗教のすべての権力を一手に握った「神的王」によって支配されていた。ミュケナイの諸王国は「奴隸制と貢納制をもつ」官僚制国家であった。オリエント風の専制君主国家であり、そこでは農民は王に対する貢納の義務を負う隷属民であった<sup>5)</sup>。

このミュケナイ文明は東地中海世界を襲った「1200年のカタストロフ」<sup>6)</sup>で突然姿を消した。宮殿はことごとく破壊された。猛火に包まれた形跡がほとんどの宮殿跡に残っており、破壊は北から南へと進んだ<sup>7)</sup>という。その原因に

については、侵略・内部抗争・奴隷の反乱・地震・干ばつ・海賊、あるいは度をこした官僚化の弊害がもたらした制度崩壊など<sup>8)</sup> 様々に指摘されている。

記録は消滅し、壮大な建築物は失われ、人口は全盛期のおそらく5分の1以下におちこんだと言われている。ドーリア人を始めとする諸種族の移動の波がギリシアを襲い、ミュケナイ文明の社会的遺制の多くを洗い流したのである<sup>9)</sup>。農民はミュケナイの諸王朝の貢納制から解放されたが、と同時によく整備された農耕制度もほとんど壊滅し、かろうじて自給自足できる農耕生活に戻ってしまった<sup>10)</sup>、という。

王権の弱体化、あるいは消滅のなかで共同体規制は弛緩し、耕地の共有や共同耕作はなくなった。生産が個別的に行われる条件が増すにつれ、私有財産は土地にまで及ぼされた。新しい村共同体が形成されたが、集団占拠した土地（共有地）は各家族に分割地として配分された。共同体の成員に持ち分として分配された分割地は、籤（くじ）引きで分けられた土地という意味で、「クレーロス」（klēros）あるいは「クラーロス」（klāros）と呼ばれた<sup>11)</sup>。それは小麦などの穀物が栽培される10エーカー（4ヘクタール）ほどの耕地であり、境界を示す石がおかれ、オリーブやぶどうなどの果樹園には垣根や溝がめぐらされていた<sup>12)</sup>。

## 1.2. 天水農業

山と湾がせまりその間にかろうじて盆地や平野が広がるようなギリシアの地形では、耕作に必要な水を得るには降雨に頼るしかなかった。このことは、ヘロドトスに語ったというエジプト人の言葉からも明らかである。

「というのは、ギリシアの国土はことごとくその灌漑はエジプトのように河によらず、雨を俟つということを知ったエジプト人が、ギリシア人はいつかきっと大変な当てはずれをして恐ろしい飢饉に襲われるであろう、といったことがあるからである。その言葉の意味は、もし神がギリシアに雨をふらせようとせず旱魃を起こされたならば、ギリシア人は飢饉の厄に見舞われるであろう、彼らには天帝ゼウスから賜る以外には水を得る当てがないから、

戦士と食卓（的射場）

というのである。」（『歴史』巻2・13）<sup>13)</sup>

エジプトなどのオリエント世界での農業は、「ギリシアの国土はことごとくその灌漑はエジプトのように河によらず」と言うことばが示すように、大規模な土木事業によって作られた運河から水を耕地へ引き入れることによって可能となっていた。農業を営むには、王の「官僚制」によって組織された集団労働による「運河・灌漑」施設の建設と維持が不可欠であった。「河によらず、雨を俟つ」というギリシアの農業が「天水農業」であるとすれば、オリエント世界の農業は「灌漑農業」であった。それゆえオリエント世界の農民は、土木事業を組織できる一人の強大な専制君主に隷属せざるをえなかった<sup>14)</sup>のである。

これに対して、ギリシアにおいては、小麦や大麦やぶどうを育てるのは冬季の雨であり、そしてその雨水をためて湧き出る泉が灌漑や飲料水の源であった。泉があるところに村落が発達した。まさにオリュンピアにいます神ゼウスが降らす雨に頼るという天水農業であった<sup>15)</sup>のだ。ギリシアの農民は、運河などの灌漑施設を建設・維持する強大な王権など必要としなかったのである。

分割地<sup>クレーロス</sup>という私有地を得た農民は、泉から水をひく溝を整備し、耕作の畝の深さを適切にし、剪定を巧みにおこない、種蒔きや植物の成長に対する配慮を忘れず行うという、まさに家族による、その中にはすでに家内奴隷もいたのだが、個別労働によって農業を行うことができた。その日常的反復こそが、農民の経済的自立を保証した<sup>16)</sup>のである。

したがって、暗黒時代の、ポリス形成前夜のギリシアの農民は、王の土地を耕す隷属民でもなく、貴族の土地を借りる借地農でもなく、分割地<sup>クレーロス</sup>によって経済的に自立していた独立自営農民であった。ウェーバーによれば、この時代にあつては、「土地に持分地をもつということと一般自由民であるということ」とは同じこと<sup>17)</sup>であり、それゆえ、アリストテレスがポリスは「いくつかの村から生じ」と述べたところの村共同体<sup>コムニタス</sup>は、このような自由民の共同体であったと言ってよいであろう。

### 1.3. フラトリア（兄弟団）とブリュタネイオン

暗黒時代の村共同体にとって一番の課題は、生産ではなく、「安全」であった。安全を保証するような国家組織が存在していなかったからである。したがって、この段階の社会で、一般自由民相互の安全保証を、「個人の安全を血の復讐の義務を負うことによって保証しあうひとびと」からなる、人為的に形成された団体が、ウェーバーによれば、「フラトリア」(phratry)<sup>18)</sup>であった。

このフラトリアという団体は、ポリス形成後には、「フューレー」(phylai)という「部族」(tribe)の地域的な小区分として「行政的機能と祭祀的機能」とを持つようになる<sup>19)</sup>。フラトリアは、「兄弟団」(brotherhood)という疑似種族的な血縁団体であり、軍事的な目的をもった、それゆえ人為的に形成された「戦士の兄弟団」(brotherhood of warriors)<sup>20)</sup>であった。

フォレストによれば、「フラトリアは、国家組織がほとんど存在しなかったところのドーリア人侵入後の無秩序の時代」<sup>21)</sup>に生まれた。ウェーバーも同様にフラトリアの起源を、ギリシア諸種族が移動し征服と定着を行っていた暗黒時代にあったのではないかと推測している。すなわち、フラトリアは、ドーリア人の移動という暗黒時代の「占領地または外敵の脅威を受けた地域における一般自由農民の慣行を起源とする」<sup>22)</sup>ものであり、「土地所有者が戦士共同体として組織された発展段階、かれらの土地が《槍をもって獲得されたもの》と考えられた発展段階」<sup>23)</sup>のものなのである。

農民が王の土地や貴族の土地を耕す隷属民であれば、その安全は王の軍隊や貴族によって保証されたはずである。また、村共同体の安全が、村の有力者たる貴族によって担われていたのであれば、そもそも「血の復讐」によって安全を担保するような団体は必要ではない。だが、分割地を配分され経済的に自立していた農民にとって、自らの安全を保証するものは、おそらく自らと自らの武器でしかなかったのであろう。それゆえ、まさに土地所有者が「戦士共同体」として組織されざるを得なかったのである。

ここで特に強調しておきたいのは、ウェーバーによる、フラトリアは「一般自由農民の慣行」が起源であるという指摘である。村共同体の安全を、一般自由

農民が、自ら武装し、自らで守らなければならなかったという事情である。農業を続けるために避けることのできなかった集団としての活動は、かれらの生活と生産の場を隣接共同体の攻撃から守ることであった。そして、富の多寡や血統によって村の有力者たる貴族と平民という階層分化は生じていたが、それが身分制的な支配被支配関係にまで転化してはいなかったであろうということである。つまり、有力者たる貴族が自ら軍事力を独占し、村共同体の安全を守り、平民としての農民を支配するというようなことはなかった。身分的な支配服従関係は生じていなかったし、いわんや奴隷制的な主従関係になることもなかった<sup>24)</sup>。農民と貴族は同じ自由民として村共同体の平等な成員だったのである<sup>25)</sup>。

プルタルコスが、「それぞれの部落にあった公会堂」<sup>プリュタネイオン</sup><sup>26)</sup>と述べているプリュタネイオンの意味について、ここで若干述べておきたい。

プリュタネイオンは、ヘスティアという「炉の神」が祀られている神聖な場所であった。炉の神たるヘスティアは、オリュポスの十二神の一人であり、ゼウスによって「すべての人間の家、神々の神殿において祭られる特権」を与えられていた。家の<sup>ヘスティア</sup>炉は、家の中心であり、この女神は家庭生活の女神として崇められただけでなく、<sup>ヘスティア</sup>炉は犠牲を捧げる所でもあったので、祭壇の女神として祈願も受けていた<sup>27)</sup>。

村共同体にプリュタネイオンが存在したということは、そこで<sup>ヘスティア</sup>炉が祀られ、聖なる火が燃やしつづけられていたということであり、村共同体がひとつの祭祀団体として形成されていたということを意味していた。<sup>ヘスティア</sup>炉が祀られたプリュタネイオンは、共同体の政務の場所であると同時に正餐の場であった。つまり、プリュタネイオンをもつ村共同体とは、それが、単なる地縁団体にとどまらず、食卓共同体としての祭祀団体でもあったということを示しているのである。

## 2. 暗黒時代末期の王政

### 2.1. 『イリアス』の農民戦士

ミュケナイ文明の崩壊からポリスが形成されるまでのおよそ400年の間がギ

リシアの暗黒時代であるが、オリエント風の強大な専制国家は民族移動の波の中ですでに姿を消していた。とすれば、テセウスが廃した王政は、そのような王政であるはずがない。その代りに出現していたのは、テセウスが「有力者」と述べている地方豪族による小王国の割拠状態である。新しく生まれてきた村共同体の上に、あるいは、その隣に、小範囲の共同体の「族長」(bashileus)としての王が、村共同体を勢力圏にとりこもうとして、互いに争っていた<sup>28)</sup>。

このような暗黒時代末期すなわちポリス形成前夜の王政の姿を垣間見せてくれるのは、ほかならぬホメロスの叙事詩である。『イリアス』には、英雄同士の決闘や武勇自慢の描写があふれているが、その背後には武装した歩兵集団（農民戦士）の戦いが見てとれる。

「軍勢は王の言葉を聞いて一層緊密に隊伍を固めたが、それはあたかも一人の男が、風の力を防ぐべく、隙間なく石を組んで高い館の壁を築くよう、そのさまにも似て兜と臍金はそがねを打った楯とがぴたりと接し、楯と楯、兜と兜、人と人もたとが凭れ合う。馬毛の飾りを戴いた兜は、首を垂れるたびに、前立の角が触れ合ったが、それほどにも軍勢は隙間もなく密に立ち並んでいた。」<sup>29)</sup>（『イリアス』第16歌）

「隙間なく石を組んで高い館の壁を築くよう、そのさまにも似て兜と臍金を打った楯とがぴたりと接し」「隙間もなく密に立ち並」ぶ軍勢の姿は、ポリス形成後にはっきりした姿をあらわす重装歩兵の密集方陣の隊形を彷彿とさせるものである。

動員されている兵士は、王の食卓で扶養されている従士でもなく貴族の私兵でもなかった。トロイア攻撃の是非を問う集会の場（アゴレー民会）(agorē)に兵士たちが召集されていることから分かるように、かれらは武装自弁の農民戦士であった。その集会の場（アゴレー民会）で全軍の総帥アガメムノンに噛みついたのが、一介の兵士にすぎなかったテルシテスである。テルシテスはホメロスの英雄叙事詩の中で描かれている唯一の平民である。

「兵士らはみな腰をおろし、それぞれおとなしく席に控えている中で、ひとりテルシテスのみは、口汚く罵りつづけてやまなかった。…さてこの時も

## 戦士と食卓（的射場）

また、大将アガメムノンに向かって金切り声をあげ、悪口雑言を並べ立てたが、アガメムノンに対してはアカイア軍の兵士らの怒りも激しく、心中穏やかならぬものがあったのである。<sup>30)</sup>（『イリアス』第2歌）

ここには、王の権威にひるまず公然と自分の意見を述べてはばからない平民の姿が、ホメロスによって活写されている。もちろん、すぐに英雄オデュッセウスによって叱責され、皆の笑いものになっているが…<sup>31)</sup>。

## 2.2. ホメロスの王政

ホメロスが描いた王政、いわゆる「ホメロスの王政」<sup>32)</sup> はもはや官僚制を備えたオリエンタ的な専制国家ではなかった。<sup>バシレウス</sup>王 は、小範囲の共同体の族長の一人にすぎなかった。<sup>バシレウス</sup>王 を補佐すると同時に制約していた公的機関は二つあり、一つは、有力者たる名門貴族からなる「評議会」(boulē) であり、もう一つは、<sup>クレーロス</sup>分割地所有農民＝戦士からなる自由人総会すなわち<sup>アゴレー</sup>民会 (agorē) であった。共同体のあらゆる重要事は、評議会にはからなければならず、異常事態にあつては、つまり、先に引用したトロイア攻撃の是非などを決定する場合には、<sup>アゴレー</sup>民会にも相談しなければならなかった<sup>33)</sup>。

ホメロスの王政の<sup>バシレウス</sup>王 は、村共同体の部族の長の中でもっとも尊敬されている者であり、ホメロスが描くトロイア戦争の総帥アガメムノンもミュケナイ社会の諸王国の<sup>ワナクス</sup>「王」(wanax) のような専制君主ではなく、あくまでも共同体成員のなかの有力者の一人、いわば「同等者のなかの第一人者」(primus inter pares)<sup>34)</sup> にすぎなかった。<sup>バシレウス</sup>王 は、臣下たちを対立させるような紛争を解決する責任をもつ裁判官であり、神々を祭る儀式の最高の長たる神官であり、そして戦時には軍隊を統率する最高指揮官であり、いわば終身の執政官であった<sup>35)</sup>。

## 3. ポリスの形成と市民

### 3.1. 戦士共同体

<sup>シュノイキスモス</sup>

集住によるポリスの形成へとギリシア人を促したのは、ウェーバーによれ

ば、ギリシア世界における「慢性的な戦争状態」である。「慢性的戦争状態は、ギリシアの国際法によって、この時代いらい正常の状態」<sup>36)</sup>と見なされていたからである。それゆえ「シュノイクスモス〔集住〕は何よりもまず、フューレーおよびその小区分に編成された軍隊の創出」なのであり、「戦士階級が都市国家の主人として組織されたことを意味」<sup>37)</sup>したのである。フューレーとはすでに見てきたように部族のことであり、部族内には軍事団体としてのフラトリアが小集団として存在していた。ポリスの形成とは、何よりもフラトリア（戦士の兄弟団）の結集であり、アテナイなどのイオニア系のポリスの場合は、フラトリアをその内部にもつ四つの部族から編成されていた<sup>38)</sup>。

ポリスは、都市ではあったが、他の地域における都市のように市場や港などの商工業の中心地や聖域あるいは王の居住地の周囲などに商工業者などが自然発生的に集まり、漸次的に作られたものではなかった。フラトリアの結集としての戦士共同体の形成であるがゆえに、ブルクハルトが指摘するように、ギリシアにおけるポリスの成立は「つねにただ、強い、瞬間的意思もしくは決意の結果として、一回的なもの」<sup>39)</sup>であったのであろう。アテナイ成立におけるテセウス伝説が暗示しているのは、まさにこのことである。そしてそれはまたポリスの市民とは何かを規定するものである。ポリスの市民であるということは、まずもって戦士集団としてのフラトリアの成員であるということを要求したのである。

フォレストによれば、紀元前510年においても、大多数のアテナイ人にとって「市民権の必要にして十分な条件はフラトリアの成員権であった」<sup>40)</sup>。フラトリアの一員は、同僚が殺人などの犠牲者になった場合には、その犠牲者の家族を訴訟などにおいて支援する義務を負っていた<sup>41)</sup>。そういう依然として濃厚な仲間団体的な色彩をもつ団体の一員であることが、市民権の必要条件であった<sup>42)</sup>のである。

したがって、ポリスの形成とは、何よりも戦士共同体の形成なのであり、市民は武装自弁の戦士<sup>43)</sup>であった。ポリスは、防衛能力を有する防衛団体として、自立した国家組織として形成されたのである。

### 3.2. 祭祀団体

ポリス形成後のギリシア人は、強固な市民団の内部団結を有していた。時代は下るが、ペルシア戦争（紀元前500－前448）の時、ペルシアの王クセルクセス一世にアテナイは占領され、城壁の外に追い出された。紀元前480年のサラミス海戦を前にして、テミストクレスは同盟諸国の将に次のように述べている。

「自分たちの兵員を具えた二百の艦船のある限り、自分たちには彼ら同盟諸国よりも強大な国家と国土があるのだ、現にアテナイの攻撃を撃破しうる力のある国は、ギリシア中を探しても一国だにないではないか」<sup>44)</sup>（ヘロドトス『歴史』第8巻61節）

都市を離れても崩れないような強固な市民団の内部団結、そして生命力をギリシアのポリスは有していた<sup>45)</sup>。それは、ウェーバーによれば、ポリスの形成が、「宗教的に兄弟の契りを結ぶこと」<sup>46)</sup>によってなされていたからである。ポリスは「兄弟盟約として構成された団体」<sup>47)</sup>であり、それゆえ、「市民たちの一市民としての資格にもとづく一団体的信仰」<sup>48)</sup>によって市民は一体となっていたのである。

市民を守る神の座所としての神殿は、アクロポリス（acropolis）と呼ばれる小高い丘の上に建立されていた。それは、ミュケナイ時代の宮殿跡に建立されることが多かった。アクロポリスの原義は「高所の要塞」<sup>49)</sup>である。そこは外敵の来襲にあたって逃げこめる避難所であり、包囲に耐えることができるように城壁で守られていた<sup>50)</sup>。アクロポリスの丘の神殿は、都市景観上の要となり、まさにここに国家としてのポリスが存在するということを内外に示すものでもあった。この意味でポリスとは、アクロポリスの「丘の麓にこの守護神への信仰をともしにする人々が寄り集まって形成された共同体国家」<sup>51)</sup>なのである。

だがしかし、集<sup>シュノイキスモス</sup>住によるアテナイの形成において伝説の王テセウスが行ったのは、アクロポリスの丘の上に神殿を建立することではなく、それぞれの村共同体<sup>コメー</sup>が祭祀団体として有していたプリュタネイオンを一つのプリュタネイオンに統合することであった。テセウスは、「そこでそれまでそれぞれの部落

にあった公会堂や議事堂や役所を廃止して、すべてに共通な一つの公会堂と議事堂を現在の町にあるところに作<sup>52)</sup>（「テセウス」「フルタルコス英雄伝」）ったのである。

古代ギリシアでは、家でも村共同体でも<sup>ヘスティア</sup> 炉 が祀られ、聖なる火が燃やしつづけられていた。この<sup>ヘスティア</sup> 炉 が祀られた場所が、プリュタネイオンであり、正餐の場所であった<sup>53)</sup>。それゆえ集<sup>シュノイクスモス</sup> 住 によるポリスの形成においては、「諸団体が従来それぞれの正餐のために用いてきたいくつかのプリュタネイオンを廃止して、その代わりに都市の単一のプリュタネイオンを設置するという手続き」が不可欠だったのである。それこそが「兄弟盟約の結果としての都市市民の諸ジッペ〔氏族〕の食卓共同体を象徴<sup>54)</sup>」したものであった。つまり、テセウスが一つのプリュタネイオンを作ったというのは、ポリスの統合と独立を象徴する聖なる火を燃やし続けるための共通の<sup>ヘスティア</sup> 炉 <sup>55)</sup>を備えておく建物としての中央庁舎を作ったということであり、ポリスを一つの祭祀団体としたということであった。

したがって、プリュタネイオンは、ポリスの有力者であった参政官（プリュタニス）らの執務する官庁（公会堂あるいは中央庁舎）であると同時に、「最高執政官や公賓を接待する迎賓館」<sup>56)</sup>としても使われており、ここで正餐にあずかることは、市民にとって最高の栄誉とされていた。外国からの使節や凱戦將軍、オリュンピア競技の勝者などの特に功労のあった人が、ここで正餐にあずかっていた<sup>57)</sup>のである。プラトンも『ソクラテスの弁明』のなかでソクラテスにこう言わせている。

「諸君に忠告を与えるために閑暇を必要とする一人の貧しき功労者にふさわしきものは、何であろうか。アテナイ人諸君、かくの如き人には、プリュタネイオンにおいて食事をさせる以上にふさわしいことはないのである。」<sup>58)</sup>（プラトン『ソクラテスの弁明』26）

### 3.3. ポリスと市民

ポリスという言葉のギリシア語のもともとの意味は、「町」(town)や「都

市」(city)である。すでに見てきたように、ポリスは何よりも宗教的な兄弟の契りによって形成された防衛団体であり、そしてまた祭祀団体として結集した市民団であった。

ポリスの中心的メンバーは、貴族とともに集<sup>シュノイキスモス</sup>住<sup>クレーロス</sup>した分割地所有農民であり、「ポリスの人びと」という意味で「ポリータイ」(politai)（市民）と呼ばれた。アテナイのように大きなポリスでは、ポリスは城壁に囲まれた都市と周辺領域とで構成されていた。都市に住む人々だけでなく地方に住む人々も、ポリスの中に一緒に住んでいるかのようにそう呼ばれた<sup>59)</sup>のである。

ポリスが市民団として国家であると同時に都市であるためには、村共同体<sup>コームーネ</sup>の人々が城壁で囲い込まれた一定区域の共有地に強制的に移り住むという集<sup>シュノイキスモス</sup>住<sup>シュノイキスモス</sup>が、必要であった<sup>60)</sup>。国家として結集した市民団の恒常性は、城壁の内側に市民が集まる公共建造物と市民団の居住地を構築することで確保されたのである。ギリシア人は、単なる都市でもなく、単なる国家でもなく、都市であり国家でもある「都市国家」としてのポリスを、集<sup>シュノイキスモス</sup>住<sup>シュノイキスモス</sup>によって、「強い、瞬間的意思もしくは決意の結果として、一回的なもの」として形成したのである。それゆえ、ブルクハルトによれば、ポリスは、「決定的なギリシア的な国家形態」<sup>61)</sup>なのである。

アリストテレスによれば、王権が担っていた仕事を担う権利は、「自費で武装し得る人々に与えられていた」（『アテナイ人の国制』第4章1）<sup>62)</sup>のである。市民は戦士として国家の防衛にあたるだけでなく、国家の運営も担った。アリストテレスは、市民を「審議と採決に関する公職に参与する資格のある者」（『政治学』（第3巻第1章）<sup>63)</sup>と定義しているが、ポリスは常設の官僚装置や常備軍を備えていたわけではなかったので、市民団がまさに国家そのものであった。それゆえ、市民の政治参加は、まさに当然の要請であった。

## 結びに代えて

アーレントは、ギリシアポリスと政治的であるということとの関係について、

次のように述べている。

「政治的であるということは、ポリスで生活するということであり、ポリスで生活するということは、すべてが力と暴力によらず言葉と説得によって決定されるという意味であった。」<sup>64)</sup>

これに対して、「暴力によって人を強制すること、つまり説得するのではなく命令すること」は、「ポリスの外部の生活に固有のもの」であり、「家長が絶対的な専制的権力によって支配する家庭や家族の生活に固有のもの」<sup>65)</sup>であった。

つまり、ポリス内部では、つまり、アゴラ（agora）という広場を中心とした公共空間では暴力が排除され、言葉と説得による政治を市民はおこなっていたが、他方では、市民は、かれらの生活を支えていた家（<sup>オイコス</sup>oikos = household）の領域においては、家長として、アリストテレスがいう「主人的支配」を行っていたのである。「主人の支配は自然による奴隷を対象」<sup>66)</sup>としているが、パーカーによれば、この主人的支配は、奴隷に対する主人の関係だけでなく、子どもに対する親の、妻に対する夫の関係も含んでいる<sup>67)</sup>、という。

ギリシアのポリスは、これまでその形成について見てきたように、戦士共同体であった。それゆえ、フランスの古代ギリシア史家ピエール・ヴィダル＝ナケが言うように、ギリシアのポリスは、「二重の拒絶」で自らを明確にしていた。ポリスは、女性を拒絶することで「男のクラブ」なのであり、奴隷を拒絶することで「市民クラブ」<sup>68)</sup>であった。まさしくクラブともいべき団体を形成することで、自由で平等な市民団を形成していたのであり、それ故、女性と奴隷、それに居留外国人をポリスの世界から、政治の世界から排除していたのである。

アリストテレスも『政治学』第1巻第2章「国家の発生、『人間は自然によって国家的動物である』」において、次のように述べている。

「国家は自然によるものの一つであり、そして人間は自然によって国家的（ポリス的）動物である。そして偶運のいたずらでなく、生れついた性質のゆえに国なき者は、人間として劣悪な者か、それとも人間を越える存在であるかのいずれかである。ホメロスが非難したように、

戦士と食卓（的射場）

部族の仲間もなく、掟もなく、家の竈（かまど）もない。」<sup>69)</sup>

つまり、アリストテレスは、「人間は自然によって国家的（ポリスの）動物である」と述べているのであるが、すぐに続けて、「生れついた性質のゆえに国なき者」つまりポリスの動物でないものがあると言う。それは一体誰か。それは、「人間として劣悪な者か、それとも人間を越える存在であるかのいずれか」なのである。

それでは、具体的にはどのような人が、ポリスの動物ではないのかということに関しては直接的な言及はなく、ホメロスの『イリアス』の引用で代えている。「ホメロスが非難したように」という限定つきでの引用なので、それは「人間として劣悪な者」として「国家的（ポリスの）動物」たり得ないものを指していると思われる。

該当箇所は、こうである。

「部族もなく（clanless）、法もなく（lawless）、炉もなき者（hearthless）」<sup>70)</sup>  
（ホメロス『イリアス』第9歌63）

ホメロスの引用が明らかにしているのは、ポリスの市民は無条件につまり「自然によって」ポリスの動物であるのではないということである。われわれがすでにポリスの形成において見てきたように、ポリスの市民とは「部族」の一員であること、つまり、ポリスの内情に即していえばフラトリア（戦士の兄弟団）の一員であること、「法」の支配に服していること、そして、「<sup>ヘステイア</sup>炉」をもっているということ、つまり祭祀団体の一員であることを、必要条件としたということである。

## 註

- 1) 従来の慣用にしがたって「暗黒時代」という表現をつかったが、暗黒時代という表記が価値否定的な印象を与えることもあって、最近では価値中立的な初期鉄器時代という時代名が用いられるようになってきている、という（周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社、2005年）、44頁参照）。
- 2) ジョン・キャンブ、エリザベス・フィッシャー、（吉岡晶子訳）『図説古代ギリ

- シア』（東京書籍，2004年），21-2頁参照。
- 3) Aristotle (edited and translated by Ernest Barker), *The Politics of Aristotle* (Oxford, 1946, reprint 1977), p. 3. アリストテレス（牛田徳子訳）『政治学』（京都大学学術出版会，2001年），8頁。
  - 4) プルタルコス「テセウス」（太田秀通訳）（村川堅太郎編）『プルタルコス英雄伝 上』（ちくま文庫，1987年），32-3頁。
  - 5) 太田秀通『生活の世界歴史3 ポリスの市民生活』（河出書房新社，1975年），24頁参照。
  - 6) 周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社，2005年），42頁。
  - 7) ジョン・キャンブ，エリザベス・フィッシャー，前掲書，79頁参照。
  - 8) Cf., Victor Davis Hansen, *The Other Greeks: The Family Farm and the Agrarian Roots of Western Civilization, with a New Preface and Bibliographic Essay* (University of California Press, 1995), p. 28.
  - 9) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』，226頁参照。
  - 10) Cf., Victor Davis Hansen, *Wars of the Ancient Greeks* (Washington: Smithsonian Books, 1999), p. 33. ヴィクター・デイヴィス・ハンセン（遠藤利国訳）『図説古代ギリシアの戦い』（東洋書林，2003年），36頁参照。
  - 11) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』（岩波書店，1968年），341頁参照。
  - 12) Cf., Victor Davis Hansen, *op. cit.*, p. 44. ヴィクター・デイヴィス・ハンセン，前掲書，56頁。
  - 13) ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史 上』（岩波文庫，1971年），169頁。
  - 14) マックス・ウェーバー（上原専祿・増田四郎監修，渡辺金一・弓削達訳）『古代社会経済史』（東洋経済新報社，1963年），78-9頁参照。
  - 15) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』，414頁参照。
  - 16) 前掲書，同頁参照。
  - 17) ウェーバー『古代社会経済史』，180頁。
  - 18) 前掲書，同頁参照。
  - 19) 前掲書，同頁参照。
  - 20) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *Ancient Greece: A Political, Social, and Cultural History* (New York: Oxford University Press, 1999), p. 162.
  - 21) W. G. フォレスト（太田秀通訳）『ギリシア民主政治の出現』（平凡社，1971年），236頁。
  - 22) ウェーバー『古代社会経済史』，182頁。
  - 23) 前掲書，181頁。

- 24) 太田秀通『スパルタとアテネー古典古代のポリス社会―』（岩波書店、1970年）、50-1頁参照。
- 25) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 35. ヴィクター・デイヴィス・ハンセン、前掲書、41頁。
- 26) プルタルコス「テセウス」、32頁。
- 27) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（岩波書店、1960年）「ヘスティアー」参照。
- 28) Cf., Victor Davis Hansen, *op.cit.*, p. 33. ヴィクター・デイヴィス・ハンセン、前掲書、36頁参照。
- 29) ホメロス（松平千秋訳）『イリアス 下』（岩波文庫、1992年）、124-5頁。
- 30) ホメロス（松平千秋訳）『イリアス 上』、52-3頁。
- 31) 前掲書、54-5頁参照。
- 32) クロード・モセ（福島保夫訳）『ギリシアの政治思想』（白水社、1972年）、10頁。
- 33) 太田秀通『ミュケナイ社会崩壊期の研究』、354頁参照。
- 34) 太田秀通『テセウス伝説の謎ーポリス国家の形成をめぐる一』（岩波書店、1982年）、43頁。
- 35) クロード・モセ、前掲書、11頁参照。
- 36) マックス・ウェーバー『古代社会経済史』、200頁。
- 37) 前掲書、同頁。
- 38) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *op. cit.*, p. 162.
- 39) ブルクハルト（新井靖一訳）『ギリシア文化史 1』（ちくま学芸文庫、1998年）、138頁。
- 40) W. G. フォレスト『ギリシア民主政治の出現』、236頁。アリストテレスは、『アテナイ人の国制』において、クレステネスの改革の後においても「彼は各人に氏族とかプラトリアに所属し、またそこで神官職に就くことを父祖伝来の制度に従って存続させることを認めた」（アリストテレス（村川堅太郎訳）『アテナイ人の国制』（岩波文庫、1980年）、46頁）と述べている。村川堅太郎氏の訳注によれば、市民の新生男児は生後3年ぐらいでプラトリア団員に紹介され、嫡出子と認められたものが、プラトリアの戸籍に登録された。嫡出の証となる両親の正式の結婚についても、婚姻届や台帳はなかったが、新郎が自分のプラトリアの団員のために結婚祝いの供儀と饗宴を行って、団員の確認を得るのが習慣だった、という（村川堅太郎のプラトリアについての訳注、前掲書、179頁参照）。
- 41) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert

Roberts, *op. cit.*, p. 162.

- 42) Cf. Peter Liddel, *Civic Obligation and Individual Liberty in Ancient Athens* (Oxford University Press, 2007), p. 73.
- 43) ソロンの改革において、市民が戦士であることを彷彿させるようなことを規定している。「ソロンは国内にしばしば党争が起こるにもかかわらず市民の中には無関心から成行きに委ねるのを好む者のあるのを見て取り、かかる人々に対する独特の法を設け、国内の党争あるとき両派のいずれかに与して武器をとることのないものは市民たる名誉を喪失し国政に与り得ぬこととした。」（アリストテレス『アテナイ人の国制』, 26 頁）。
- 44) ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史 下』（岩波文庫, 1972 年）, 182 頁。続けてテミストクレスは、次のように述べている。「しかしもし私の計画を実行してくれぬのならば、われわれはこのまま直ちに家族を収容してイタリアのシリスへ移住するであろう。この町は古くからわが国の所有であり、託宣もこの町がわれわれによって植民さるべきことを告げているのだ。」（前掲書, 183 頁）ブルクハルトが、近世の都市住民との比較の中で述べている、古代ギリシアのポリス住民の「移住可能性」（ブルクハルト, 前掲書, 565 頁）が、ここにははつきりと見て取ることができるだろう。
- 45) ブルクハルト, 562-74 頁参照。
- 46) マックス・ウェーバー（黒正巖・青山秀夫訳）『一般社会経済史要論下巻』（岩波書店, 1955 年）, 183 頁。
- 47) ウェーバー（世良晃志郎訳）『都市の類型学』（創文社, 1964 年）, 81 頁。
- 48) 前掲書, 82 頁。
- 49) 桜井万里子「ポリスの時代」桜井万里子編著『ギリシア史』, 52 頁。
- 50) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 116 頁参照。
- 51) 桜井万里子「ポリスの時代」, 前掲書, 52 頁参照。
- 52) プルタルコス「テセウス」, 32 頁。
- 53) 高津春繁, 前掲書, 「ヘステイアー」参照。
- 54) M・ウェーバー『都市の類型学』, 83 頁。
- 55) 新しい都市を形成するときには、「市の炉の火が移植民によって新市にもたらされた」（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』）のである。
- 56) ジョン・キャンブ, エリザベス・フィッシャー, 前掲書, 253 頁。
- 57) 久保勉「解説」, プラトン（久保勉訳）『ソクラテスの弁明・クリトン』（岩波文庫, 2007 年改版）, 110 頁参照。
- 58) プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』, 58 頁。ソクラテスを告発したメレトスは、かれを「死刑に処することを提議した」のに対して、逆にソクラテスが民衆法廷に提議したのが、「プリュタネイオンにおける食事」である。ソク

ラテスは言う、「もし私が正しきに従って私が当然受くべきものを提議すべきであるならば、私はこれを提議する、すなわちプリュタネイオンにおける食事を。」（前掲書、59頁）。

- 59) Cf., Sarah B. Pomeroy, Stanley M. Burstein, Walter Donlan, Jennifer Tolbert Roberts, *op. cit.*, p. 84.
- 60) *Ibid.*
- 61) ブルクハルト、前掲書、138頁。
- 62) アリストテレス『アテナイ人の国制』、20頁。この説明は、紀元前624／3年にドラコンが制定した制度についての説明の箇所で出てくる規定である。該当箇所を、そのまま引用しておく。「参政権は自費で武装し得る人々に与えられていた。彼らは9人のアルコンと財務官とを十ムナを下らない、負債のない財産をもつ人たちから選び、その他の余り重くない役は自費で武装し得る人たちから選び、将軍と騎兵長官とは百ムナを下らない、負債のない財産と正妻から生まれた十歳以上の子供とを示し得る人たちから選んだ。」（前掲書、同頁）。
- 63) *The Politics.*, *op. cit.*, p. 95. アリストテレス『政治学』、116頁。
- 64) Hannah Arendt, *The Human Condition* (The University of Chicago Press, 1958, paperback edition 1989), pp. 26-7. (志水速雄訳)『人間の条件』（筑摩書房、1994年）、47頁。
- 65) *Ibid.* 前掲書、同頁。
- 66) *The Politics.*, *op. cit.*, p. 17. アリストテレス『政治学』、23頁。
- 67) Cf., Ernest Barker, *op. cit.*, p. 17.
- 68) ピエール・ヴィダル＝ナケ（金澤良樹訳）「伝承・神話・空想社会における奴隷制度と《女たちによる支配》」（『現代思想特集＝甦るギリシャ』（青土社、1999年8月号）、229頁。
- 69) *The Politics.*, *op. cit.*, p. 5. アリストテレス『政治学』、9頁。
- 70) *Ibid.* ここでは、山本光雄訳を用いている。アリストテレス（山本光雄訳）『政治学』（岩波文庫、1961年）、35頁。このアリストテレスのホメロスからの引用箇所は、『イリアス』第9歌63である。邦訳では「無籍者か無法者、または家を持たぬ浮浪者の類い」（松平千秋訳、268頁）となっているが、意識のし過ぎのような気がする。

※本稿は、平成16年度－19年度科学研究費補助金（基盤研究（A）政治理論のパラダイム転換・研究代表者千葉真（国際基督教大学）・課題番号16203008）に基づく研究成果の一部である